

聖書日課 『からし種』 2020.5.10-5.17

<p>5月10日 (日)</p> <p>歴代誌下 22章</p>	<p>「アハズヤの母アタルヤは息子の死んだのを見て、直ちにユダの家の王族をすべて滅ぼそうとした」(10節)。王の継承をめぐる腹黒い争いを見ると、神への信仰は「お飾り」であり、王権を立てる「道具」にすぎないことが分かる。私たちが神を礼拝するのは何のためか。神の御旨に従い、神の前に小さくされる信仰だろうか。点検しつつ、主の日の礼拝に臨みたい。</p>
<p>11日 (月)</p> <p>歴代誌下 23章</p>	<p>「そこで彼らは王子(ヨアシュ)を連れて現れ、彼に冠をかぶらせ、掟の書を渡して、彼を王とした」(11節)、「アタルヤは衣を裂いて、『謀反、謀反』と叫んだ」(13節)。アタルヤにとっては「謀反」だが、モーセの掟を大切にする人びとには「正常化」だった。人間が語る「正義」はいかに危ういものであろうか。私たちは聖書の前に絶えず自己吟味が求められる。</p>
<p>12日 (火)</p> <p>歴代誌下 24章</p>	<p>「ヨアシュは祭司ヨヤダの生きている間は主の目にかなう正しいことを行った」(2節)。ヨアシュ王は祭司ヨヤダの力で七歳で王位に就き、神殿正常化に力を注いだ。しかし祭司ヨヤダが死ぬと「反ヨヤダ派」がヨアシュ王を取り込んでいく。神礼拝が利権と結びついたところでは宗教は簡単に墮落してしまう。私たちの神礼拝はまっすぐ神に向かっているだろうか。</p>
<p>13日 (水)</p> <p>歴代誌下 25章</p>	<p>「アマツヤは二十五歳で王となり…主の目にかなう正しいことを行ったが、心からそうしたのではなかった」(1、2節)。アマツヤの祈りはそれなりに「信仰深く」見えるが、「心から」の信仰ではないことが次第にあばかれていく。神の前に誤魔化しはきかないのだ。ひるがえって自分の信仰を見つめる時、「心から」と言えるものをどれだけ持ち合わせているだろうか。</p>

聖書日課 『からし種』 2020.5.10-5.17

<p>14日 (木)</p> <p>歴代誌下 26章</p>	<p>「ウジヤは十六歳で王となり、五十二年間エルサレムで王位にあった」(3節)、「神を畏れ敬うことを諭したゼカルヤが生きている間は、彼も主を求めるように努めた」(5節)。国を繁栄させたウジヤの名声はエジプトまで及んだが、後年その思い上がりによって墮落し、重い皮膚病に苦しめられ死んでいった。私たちにも「厳しく諭してくれるゼカルヤ」が必要なのだ</p>
<p>15日 (金)</p> <p>歴代誌下 27章</p>	<p>「彼(ヨタム)は、父ウジヤが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく行った。ただ主の神殿に入ることはしなかった」(2節)。父ウジヤが思い上がり、神殿で祭司として振舞ったため神から罰せられたことをヨタムは見ていた。王の権力が神礼拝を都合よく取り込む「危険」に聖書は警鐘を鳴らす。この世の力が神の前にへりくだる大切さを心に刻んで。</p>
<p>16日 (土)</p> <p>歴代誌下 28章</p>	<p>「このアハズ王は、災難のさなかでも、なお主に背いた。…『アラムの王の神々は、王を助けている。その神々に、わたしもいけにえをささげよう。そうすればわたしも助けてくれるだろう』」(22~23節)。利益を求める信仰は他人の庭が青く見える。災難の中ではつい「見える利益」を求めたくなるが、真の神に向き合う自らの信仰の点検こそが大切ではないか。</p>
<p>17日 (日)</p> <p>歴代誌下 29章</p>	<p>「主があなたたちをお選びになったのは、あなたたちが御前に出て主に仕え、主に仕える者として香をたくためである」(11節)。ヒゼキヤは今までの礼拝の在り方を見直した。「私が何者で、何のために存在するのか」を再確認した。私たちは生命全体で主を賛美し、主の働きを担うことを託されている。主イエスの生き方に倣い私たちが置かれている時代を歩みたい</p>